





被災者を対象にした政府の調査で、半数以上が車で避難したことが公表され驚いた。

津波が押し寄せて来たときに車で避難して大丈夫か。どうしても車を使う場合は、日本自動車連盟（JAF）愛知支部事業課交通環境係の寺本浩さん『写真』に聞いた。  
（聞き手・林勝）  
—東日本大震災では大勢が車で避難した。

JAF 愛知支部

## 寺本 浩さん

今回はモーターゼーションが発達した社会が巨津波に遭遇した初のケースと思う。震災の避難に車を使わないことは交通の教則にも明記してあるが、今後は車の避難

もならない。命を守るために車が本当に必要なと考えてほしい。

—自分の身はさておき、家族を守るために車で行動したい人もいる。

## 選択肢を増やそう

も想定せざるを得ないだろう。ただ、車があると「家族を捜したい」「家に荷物を取りに戻りたい」と、あれもこれも考えてしま

—実際に車が役立つのが問題。政府の調査でも、車の利用者で三分の一が渋滞に巻き込まれた。建物や道路の損壊で走行できない場所も多数あった。あまり表には出

ていないが、被災地では相当の数の交通事故が起こったという情報がある。非常事態なので、道路に人が一斉に出てくるような混乱が各地であった。加害者になった人も大勢いたはず。「それでも車で逃げますか」と言いたい。

—車を使うメリットは限られるのか。津波なら到達までに時間があるが、住んでいる場所で一概にいえない。病気で歩けない家族がいたり、近くに高い建物や高台がない場合はやむを得ないかもしれない。

—でも、普通の住宅地でも渋滞が起きやすくなるので、あてにできない。最悪の事態を想定して車に頼らない避難の選択肢を日ごろから増やしておくべきだ。

—運転中に被災した場合の注意点は、異変を感じたらすぐに他の通行を邪魔しない場所に停車し、ラジオをつけて情報収集を。車を置いて避難するなら、エンジンを止めて窓を閉め、キーは付けたまま、ドアをロックせずに離れてほしい。

## 車の使用 — 識者に聞く

## 帰宅への期待 恐怖に

うれしいと素直に思えたのは、ほんの一瞬だけだった。8月下旬、昼下がりの仮設住宅。一時帰宅を控えた幸さんは、被ばくの恐怖と闘っていた。

2週間前、テレビのニュースで3km圏内の一時帰宅が始まると知った一家は久々の朗報に沸き立った。「家から何を持ち帰ろ

うか」。帰省中の梨奈さんも加わり、早速、家族会議が始まった。全員一致は、家族のアルバム。次いで梨奈さんは部活仲間から贈られた寄せ書き、沙也加さんは学校の制服を望んだ。家族みんなが笑っていた。

だが、そんな笑顔は新たなニュースですぐに消え去った。文部科学省が警戒区域の積算被ばく線量(推計値)を公表したのだ。原発から1kmの自宅周辺は1年間で400マイクロシーベルト。国際放射線防護委員会が勧告する緊

原発1kmからの避難  
いつの日か

—13—

急時の上限の4倍に達していた。防毒マスクをした自分たちの姿が思い浮かんだ。

「(線量が高いと)分かっていたはずなのに、怖くてたまらなくなった」。追い打ちをかけるように、政府は線量の極めて高い一部地域を警戒区域の解除対象から外すことも検討し始めた。

やがて、福島県大熊町から通知が来た。一時帰宅の参加の意向を尋ねる内容だった。「参加する」と記入して返信したものの、

釈然としない。「将来、健康被害を訴えても国や自治体は責任を持ちません。決めたのはあなたですから」。無機質な文面は、そう突き放しているようにすら思える。

**福(はなわ)さん一家** 原発事故で福島県大熊町から避難。光一さん(43)と妻幸さん(43)、次女沙也加さん(15)は豊田市で暮らし、会津若松市に移った。長女梨奈さん(18)は東京で大学生活。